

競馬がますます
楽しくなる

続 ファンにやさしい

馬学講座

第 53 回

馬はどのくらい賢いのか、馬の知能について③

講師

楠瀬 良さん

公益社団法人
日本養馬協会の
常務理事



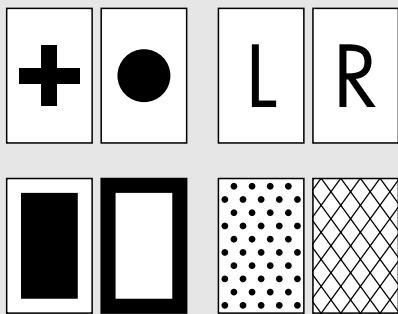
案内人：辻谷秋人
text by Akihiro Tsujiya

馬は形のの違いで
ものを見分けている

前々回のこの講座では、馬に図形を覚えさせると半年くらいは覚えていたという実験結果を紹介した。この実験は、馬に2種類の図形を示し、一方の図形に反応したときだけ餌を与えることにして、図形を見分ける能力があるかを調べるものだった。

楠瀬さんによれば、馬は最初のうちは苦労するが、実験を続けるうちに何組もの図形を見分けることができるようになったという。これは馬が形の違いでものを見分けていることの証拠となる。自分の世話をしてくれる人や自分の母馬を、視覚でも判別していると考えられるわけだ。

「それだけでなく、実験を重ねていくと新しい図形でもすぐに見分けられるようになります。このことは、馬が実験のルール自体を学習したことを意味しています」



馬にこのような2枚の図形を見せて、それぞれ模様の違いを見分けられるか調べた

前回取り上げた馬の学習能力の高さが、ここにも現れている。

そして馬はこの図形の組み合わせを最低半年は記憶していた、というのがこの実験の概要だ。カードに描かれた図形という、馬が生きていく上ではまったく意味を持たないものを、それだけ覚えていくというのは考えてみればたいしたものだ。仮に人間である自分が同じ実験を受けたとして、半年先までその図形を覚えていられるかといえば、甚だ怪しいと言わざるをえない。

馬は何年もの間にわたって記憶しているものなのか

馬の記憶を考えるにあたっての格好のテキストがある、と楠瀬さん。

「スピルバーグの『戦火の馬』という映画で、何年もの間、離ればなれになっていた少年と馬が再会したときに、お互いを認識しあったように描かれていました。そんなことが本当にあるのかを考えてみましょう」

まず、すでに述べたように馬が視覚によつて人間やほかの馬を判別しているにしても、何年もの間にわたって記憶しているものなのかどうか。

「それについて、私の見解は否定的です。競走生活を終えた牝馬が自分の生まれた牧場に帰ることは普通にありますが、帰ってきた馬が自分のことを覚えていてくれたと感じる牧場関係者はまずいけません」人間の判別は馬にとつてさほど重要なことではないのか、残念なことに牧場ですぐと世話をしていた人間を、どうも馬

は忘れてしまうようなのだ。

「それどころか、自分の母馬や娘のことも覚えていないようなのです。お互いに再会を懐かしむどころか、まったくの初対面のように社会的な順位づけの争いが始まると、牧場の人たちは言います」

では『戦火の馬』のエピソードは、感動的な絵空事にすぎないのだろうか。

「映画では、馬の記憶が呼び戻されたように見えたシーンでは、ある特定の音がキーになっていました。この馬は何年も前にその音を使って調教されていたという設定になっていましたが、そのときと同じ音が聞こえて、かつて学習で獲得したのと同じ行動を取るのには十分考えられることです」

馬の音に対する記憶力、音をきっかけとした記憶力が強いのは、以前にも書いたことがある。自分の担当厩務員のバイクの音を記憶し、聞き分ける例などがそれだ。そのあたりのことを踏まえてこの映画を作ったのであれば、さすがスピルバーグと言うべきだろう。